
【テキスト中に現れる記号について】

《》：ルビ
(例) 黄大癡《こうたいち》

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号
(例) 大癡老人|黄公望《こうこうぼう》は、

[#]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定
(数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと行数)
(例) [# 「りっしんべん+軍」、第4水準2-12-56] 南田《うんなんでん》

「黄大癡《こうたいち》といえば、大癡の秋山図《しゅうざんず》をご覧《らん》になったことがありますか？」

ある秋の夜《よ》、甌香閣《おうこうかく》を訪《たず》ねた王石谷《おうせきこく》は、主人の [# 「りっしんべん+軍」、第4水準2-12-56] 南田《うんなんでん》と茶を啜《すす》りながら、話のついでにこんな問を發した。

「いや、見たことはありません。あなたはご覧になったのですか？」

大癡老人|黄公望《こうこうぼう》は、梅道人《ばいどうじん》や黄鶴山樵《こうかくさんしょう》とともに、元朝《げんちょう》の画《え》の神手《しんしゅ》である。 [# 「りっしんべん+軍」、第4水準2-12-56] 南田はこう言いながら、かつて見た沙磧図《させきず》や富春巻《ふうしゅんかん》が、髣髴《ほうふつ》と眼底に浮ぶような気がした。

「さあ、それが見たと言って好《い》いか、見ないと言って好いか、不思議なことになっているのですが、」

「見たと言って好いか、見ないと言って好いか、」

[# 「りっしんべん+軍」、第4水準2-12-56] 南田は訝《いぶか》しそうに、王石谷の顔へ眼《め》をやった。

「模本《もほん》でもご覧になったのですか？」

「いや、模本を見たのでもないのです。とにかく真蹟《しんせき》は見たのですが、それも私《わたし》ばかりではありません。この秋山図のことについては、煙客先生《えんかくせんせい》(王時敏《おうじびん》)や廉州先生《れんしゅうせんせい》(王鑑《おうかん》)も、それぞれ因縁《いんねん》がおありなのです」

王石谷はまた茶を啜った後《のち》、考深《かんがえぶか》そうに微笑した。

「ご退屈でなければ話しましょうか？」

「どうぞ」

[# 「りっしんべん+軍」、第4水準2-12-56] 南田は銅槃《どうけい》の火を掻き立ててから、慇懃《いんぎん》に客を促した。

* * *

元宰先生《げんさいせんせい》(董其昌《とうきしょう》)が在世中《ざいせいちゅう》のことです。ある年の秋先生は、煙客翁《えんかくおう》と画論をしている内に、ふと翁に、黄一峯《こういつぽう》の秋山図を見たかと尋ねました。翁はご承知のとおり画事の上では、大癡を宗《そう》としていた人です。ですから大癡の画という画はいやしくも人間《じんかん》にある限り、看尽《みつく》したと言ってもかまいません。が、その秋山図という画ばかりは、ついに見たことがないのです。

「いや、見るどころか、名を聞いたこともないくらいです」

煙客翁はそう答えながら、妙に恥《はずか》しいような気がしたそうです。

「では機会のあり次第、ぜひ一度は見ておきなさい。夏山図《かざんず》や浮嵐図《ふらんず》に比べると、また一段と出色《しゅっしょく》の作です。おそらくは大癡《たいち》老人の諸本の中でも、白眉《はくび》ではないかと思いますよ」

「そんな傑作ですか？ それはぜひ見たいものですが、いったい誰が持っているのです？」

「潤州《じゅんしゅう》の張氏《ちょうし》の家にあるのです。金山寺《きんざんじ》へでも行った時に、門を叩《たた》いてご覧《らん》なさい。私《わたし》が紹介状を書いて上げます」

煙客翁《えんかくおう》は先生の手簡を貰《もら》うと、すぐに潤州へ出かけて行きました。何しろそういう妙画を蔵している家ですから、そこへ行けば黄一峯《こういつぼう》の外《ほか》にも、まだいろいろ歴代の墨妙《ぼくみょう》を見ることができに違いない。こう思った煙客翁は、もう一刻も西園《さいえん》の書房に、じっとしていることはできないような、落ち着かない気もちになっていたのです。

ところが潤州へ来て観《み》ると、楽しみにしていた張氏の家というのは、なるほど構えは広そうですが、いかにも荒れ果てているのです。牆《かき》には蔦《つた》が絡《から》んでいるし、庭には草が茂っている。その中に鶏《にわとり》や家鴨《あひる》などが、客の来たのを珍しそうに眺めているという始末ですから、さすがの翁もこんな家に、大癡の名画があるのだろうか、一時は元宰先生《げんさいせんせい》の言葉が疑いたくなってきたくらいでした。しかしわざわざ尋ねて来ながら、刺《し》も通ぜずに帰るのは、もちろん本望《ほんもう》ではありません。そこで取次ぎに出て来た小厮《しょうし》に、ともかくも黄一峯の秋山図を拝見したいという、遠来の意を伝えた後《のち》、思白《しはく》先生が書いてくれた紹介状を渡しました。

すると間もなく煙客翁は、庁堂《ちやうどう》へ案内されました。ここも紫檀《したん》の椅子《いす》机が、清らかに並べてありながら、冷たい埃《ほこり》の臭《にお》いがする、やはり荒廃《こうはい》の気が鋪輒《ほせん》の上に、漂っているとでも言いそうなのです。しかし幸い出て来た主人は、病弱らしい顔はしていても、人からの悪い人ではありません。いや、むしろその蒼白《あおじろ》い顔や華奢《きゃしゃ》な手の恰好なぞに、貴族らしい品格が見えるような人物なのです。翁はこの主人とひととおり、初対面の挨拶《あいさつ》をすませると、早速名高い黄一峯を見せていただきたいと言いました。何でも翁の話では、その名画がどういう訳か、今の内に急いで見ておかないと、霧のように消えてでもしましそうな、迷信じみた気もちがしたのでそうです。

主人はすぐに快諾《かいだく》しました。そうしてその庁堂の素壁《そへき》へ、一幀《いっとう》の画幅《がふく》を懸《か》けさせました。

「これがお望みの秋山図です」

煙客翁《えんかくおう》はその画《え》を一目見ると、思わず驚嘆《きやうたん》の声を洩らしました。画は青緑《せいりよく》の設色《せっしょく》です。溪《たに》の水が委蛇《いい》と流れたところに、村落や小橋《しょうきやう》が散在している、その上に起した主峯の腹には、ゆうゆうとした秋の雲が、蛤粉《ごふん》の濃淡を重ねています。山は高房山《こうぼうざん》の横点《おうてん》を重ねた、新雨《しんう》を経たような翠黛《すいたい》ですが、それがまた〔#「石+朱」、第3水準1-89-1〕《しゅ》を点じた、所々《しょしょ》の叢林《そうりん》の紅葉《こうよう》と映発している美しさは、ほとんど何と形容して好《い》いか、言葉の着けようさえありません。こういうとただ華麗《かれい》な画のようですが、布置《ふち》も雄大を尽していれば、筆墨《ひつぼく》も渾厚《こんこう》を極《きわ》めている、いわば爛然《らんぜん》とした色彩の中《うち》に、空靈澹蕩《くうれいたんとう》の古趣が自《おのずか》ら漲《みなぎ》っているような画なのです。

煙客翁はまるで放心したように、いつまでもこの画を見入っていました。が、画は見ていれば見るほど、ますます神妙を加えて行きます。

「いかがです？ お気に入り了吗か？」

主人は微笑を含みながら、斜《ななめ》に翁の顔を眺めました。

「神品《しんぴん》です。元宰先生《げんさいせんせい》の絶賞は、たとい及ばないことがあっても、過ぎているとは言われません。実際この図に比べれば、私《わたし》が今までに見た諸名本は、ことごとく下風《かふう》にあるくらいです」

煙客翁はこういう間《あいだ》でも、秋山図《しゅうざんず》から眼を放しませんでした。

「そうですか？ ほんとうにそんな傑作ですか？」

翁は思わず主人のほうへ、驚いた眼を転じました。

「なぜまたそれがご不審なのですか？」

「いや、別に不審という訳ではないのですが、実は、」

主人はほとんど処子《しよし》のように、当惑そうな顔を赤めました。が、やっと寂しい微笑を洩すと、おそく壁上の名画を見ながら、こう言葉を続けるのです。

「実はあの画を眺めるたびに、私《わたし》は何だか眼を明いたまま、夢でも見ているような気がするのです。なるほど秋山《しゅうざん》は美しい。しかしその美しさは、私だけに見える美しさではないか？ 私以外の人間には、平凡な画図《がと》に過ぎないのではないかと。なぜかそういう疑いが、始終私を悩ませるのです。これは私の気の迷いか、あるいはあの画が世の中にあるには、あまり美し過ぎるからか、どちらが原因かわかりません。が、とにかく妙な気がしますから、ついあなたのご賞讃にも、念を押すようなことになったのです」

しかしその時の煙客翁は、こういう主人の弁解にも、格別心は止めなかったそうです。それは何も秋山図に、見惚《みと》れていたばかりではありません。翁には主人が徹頭徹尾《てつとうてつび》、鑑識《かんしき》に

疎《うと》いのを隠したさに、胡乱《うろん》の言を並べるとしか、受け取れなかったからなのです。

翁はそれからしばらくの後《のち》、この廃宅同様な張氏《ちょうし》の家を辞しました。

が、どうしても忘れられないのは、あの眼も覚めるような秋山図《しゅうざんず》です。実際 | 大癡《たいち》の法燈《ほうとう》を継いだ煙客翁《えんかくおう》の身になって見れば、何を捨ててもあれだけは、手に入れたと思ったでしょう。のみならず翁は蒐集家《しゅうしゅうか》です。しかし家蔵の墨妙の中《うち》でも、黄金《おうごん》二十 | 鑑《いつ》に換えたという、李営丘《りえいきゅう》の山陰泛雪図《さんいんはんせつず》でさえ、秋山図の神趣に比べると、遜色《そんしょく》のあるのを免《まぬか》れません。ですから翁は蒐集家としても、この稀代《きだい》の黄一峯《こういつぼう》が欲しくてたまらなくなりました。

そこで潤州《じゅんしゅう》にいる間《あいだ》に、翁は人を張氏に遣《つか》わして、秋山図を譲ってもらいたいと、何度も交渉してみました。が、張氏はどうしても、翁の相談に応じません。あの顔色《かおいろ》の蒼白《あおしろ》い主人は、使に立ったものの話によると、「それほどこの画がお気に入ったのなら、喜んで先生にお貸し申そう。しかし手離すことだけは、ごめん蒙《こうむ》りたい」と言ったそうです。それがまた気を負った煙客翁には、多少 | 癪《かん》にも障《さわ》りました。何、今貸してもらわなくても、いつかはきっと手に入れてみせる。翁はそう心に期《ご》しながら、とうとう秋山図を残したなり、潤州を去ることになりました。

それからまた一年ばかりの後《のち》、煙客翁は潤州へ来たついでに、張氏の家を訪れてみました。すると塙《かき》に絡《から》んだ蔦《つた》や庭に茂った草の色は、以前とさらに変わりません。が、取次ぎの小厮《しょうし》に聞けば、主人は不在だということです。翁は主人に会わないにしろ、もう一度あの秋山図を見せてもらうように頼みました。しかし何度頼んでみても、小厮は主人の留守《るす》を楯《たて》に、頑《がん》として奥へ通しません。いや、しまいには門を鎖《とざ》したまま、返事さえろくにしないのです。そこで翁はやむを得ず、この荒れ果てた家のどこかに、蔵している名画を想いながら、惆悵《ちゅうちょう》と独《ひと》り帰って来ました。

ところがその後《ご》元宰《げんさい》先生に会うと、先生は翁に張氏《ちょうし》の家には、大癡の秋山図があるばかりか、沈石田《しんせきでん》の雨夜止宿図《うやししゆくず》や自寿図《じじゅうず》のような傑作も、残っているということを告げました。

「前にお話するのを忘れたが、この二つは秋山図同様、 [# 「糸 + 貴」、174-下-19] 苑《かいいん》の奇観も言うべき作です。もう一度私が手紙を書くから、ぜひこれも見ておおきなさい」

煙客翁はすぐに張氏の家へ、急の使を立てました。使は元宰先生の手札《しゅさつ》の外《ほか》にも、それらの名画を購《あがな》うべき [# 「蠹」の「虫」二つに代えて「木」、第4水準2-15-30] 金《たくきん》を授けられていたのです。しかし張氏は前のとおり、どうしても黄一峯《こういつぼう》だけは、手離すことを肯《がえん》じません。翁はついに秋山図《しゅうざんず》には意を絶つより外《ほか》はなくなりました。

* * *

王石谷《おうせきこく》はちょいと口を嚙《つぐ》んだ。

「これまでは私《わたし》が煙客先生《えんかくせんせい》から、聞かせられた話なのですか？」

「では煙客先生だけは、たしかに秋山図を見られたのですか？」

[# 「りっしんべん + 軍」、第4水準2-12-56] 南田《うんなんでん》は髯《ひげ》を撫《ぶ》しながら、念を押すように王石谷を見た。

「先生は見たと言われるのです。が、たしかに見られたのかどうか、それは誰にもわかりません」

「しかしお話の容子《ようす》では、」

「まあ先をお聴《き》きください。しまいまでお聴きくだされば、また自《おのずか》ら私《わたし》とは違ったお考が出るかもしれません」

王石谷は今度は茶も啜《すす》らずに、 [# 「女 + 尾」、第3水準1-15-81] 々《びび》と話を続けだした。

* * *

煙客翁が私《わたし》にこの話を聴かせたのは、始めて秋山図を見た時から、すでに五十年近い星霜《せいそう》を経過した後《のち》だったのです。その時は元宰《げんさい》先生も、とうに物故《ぶっこ》してしまいましたが、張氏《ちょうし》の家でもいつの間《ま》にか、三度まで代が変っていました。ですからあの秋山図も、今は誰の家に蔵されているか、いや、未《いまだ》に龜玉《きぎょく》の毀《やぶ》れもないか、それさえ我々にはわかりません。煙客翁は手にとるように、秋山図の靈妙を話してから、残念そうにこう言ったものです。

「あの黄一峯は公孫大孃《こうそんたいじょう》の剣器《けんき》のようなものでしたよ。筆墨はあっても、筆墨は見えない。ただ何とも言えない神氣《しんき》が、ただちに心に迫って来るのです。 ちょうど龍翔《りょうしょう》の看《かん》はあっても、人や剣《つるぎ》が我々に見えないのと同じことですよ」

それから一月《ひとつき》ばかりの後《のち》、そろそろ春風《しゅんぷう》が動きだしたのを潮《しお》に、私は独り南方へ、旅をすることになりました。そこで翁《おう》にその話をすると、
「ではちょうど好《い》い機会だから、秋山《しゅうざん》を尋ねてご覧《らん》なさい。あれがもう一度世に出れば、画苑《がえん》の慶事《けいじ》ですよ」と言うのです。

私ももちろん望むところですから、早速翁を煩《わづら》わせて、手紙を一本書いてもらいました。が、さて遊歴《ゆうれき》の途《と》に上ってみると、何かと行く所も多いものですから、容易に潤州《じゅんしゅう》の張氏の家を訪れる暇《ひま》がありません。私は翁の書を袖《そで》にしたなり、とうとう子規《ほととぎす》が啼《な》くようになるまで、秋山《しゅうざん》を尋ねずにしまいました。

その内にふと耳にはいったのは、貴戚《きせき》の王氏《おうし》が秋山図を手に入れたという噂《うわさ》です。そういえば私《わたし》が遊歴中、煙客翁《えんかくおう》の書を見せた人には、王氏を知っているものも交《まじ》っていました。王氏はそういう人からでも、あの秋山図が、張氏《ちょうし》の家に蔵してあることを知ったのでしょうか。何でも坊間《ぼうかん》の説によれば、張氏の孫は王氏《おうし》の使を受けると、伝家の彝鼎《いてい》や法書とともに、すぐさま大癡《たいち》の秋山図を献じに来たとかいうことです。そうして王氏は喜びのあまり、張氏の孫を上座に招じて、家姫《かき》を出したり、音楽を奏したり、盛な饗宴《きょうえん》を催したあげく、千金を寿《じゅ》にしたとかいうことです。私はほとんど雀躍《じゃくやく》しました。滄桑五十載《そうそうごじっさい》を閲《けみ》した後《のち》でも、秋山図はやはり無事だったのです。のみならず私も面識がある、王氏の手中に入ったのです。昔は煙客翁がいくら苦心をしても、この図を再び看《み》ることは、鬼神《きじん》が悪《にく》むのかと思うくらい、ことごとく失敗に終わりました。が、今は王氏の焦慮《しょうりょ》も待たず、自然とこの図が我々の前へ、蜃樓《しんろう》のように現れたのです。これこそ實際天縁が、熟したと言う外《ほか》はありません。私は取る物も取りあえず、金〔#「門<昌」、第3水1-93-51〕《きんしょう》にある王氏の第宅《ていたく》へ、秋山を見に出かけて行きました。

今でもはっきり覚えています、それは王氏の庭の牡丹《ぼたん》が、玉欄《ぎょくらん》の外《そと》に咲き誇った、風のない初夏の午過《ひるす》ぎです。私は王氏の顔を見ると、揖《ゆう》もすますかすまさない内に、思わず笑いだしてしまいました。

「もう秋山図はこちらの物です。煙客先生もあの図では、ずいぶん苦勞をされたものですが、今度こそはご安心なさるでしょう。そう思うだけでも愉快です」

王氏も得意満面でした。

「今日《きょう》は煙客先生や廉州《れんしゅう》先生も来られるはずですが、まあ、お出でになった順に、あなたから見てもらいましょう」

王氏は早速かたわらの壁に、あの秋山図を懸《か》けさせました。水に臨んだ紅葉《こうよう》の村、谷を埋《うず》めている白雲《はくうん》の群《むれ》、それから遠近《おちこち》に側立《そばだ》った、屏風《びょうぶ》のような数峯の青《せい》、たちまち私の眼の前には、大癡老人が造りだした、天地よりもさらに靈妙な小天地が浮び上ったのです。私は胸を躍《おど》らせながら、じっと壁上の画を眺めました。

この雲煙邱壑《うんえんきゅうがく》は、紛《まぎ》れもない黄一峯《こういっぽう》です、癡翁《ちおう》を除いては何人《なんびと》も、これほど皴点《しゅんてん》を加えながら、しかも墨を活《い》かすことはこれほど設色《せっしょく》を重くしながら、しかも筆が隠れないことは、できないのに違いありません。しかししかしこの秋山図は、昔一たび煙客翁が張氏の家に見たという図と、たしかに別な黄一峯《こういっぽう》です。そうしてその秋山図《しゅうざんず》よりも、おそらくは下位にある黄一峯です。

私《わたし》の周囲には王氏を始め、座にい合せた食客《しょっかく》たちが、私の顔色《かおいろ》を窺《うかが》っていました。ですから私は失望の色が、寸分《すんぶん》も顔へ露《あら》われないように、気を使う必要があったのです。が、いくら努めてみても、どこか不服な表情が、我知らず外へ出たのでしょうか。王氏はしばらくたってから、心配そうに私へ声をかけました。

「どうです？」

私は言下《ごんか》に答えました。

「神品です。なるほどこれでは煙客《えんかく》先生が、驚倒《きょうとう》されたのも不思議はありません」
王氏はやや顔色を直しました。が、それでもまだ眉《まゆ》の間には、いくぶんか私の賞讃《しょうさん》に、不満らしい気色《けしき》が見えたものです。

そこへちょうど来合せたのは、私に秋山の神趣を説いた、あの煙客先生です。翁は王氏に会釈《えしゃく》をする間《ま》も、嬉しそうな微笑を浮べていました。

「五十年|前《ぜん》に秋山図を見たのは、荒れ果てた張氏の家でしたが、今日《きょう》はまたこういう富貴《ふうき》のお宅に、再びこの図とめぐり合いました。まことに意外な因縁です」

煙客翁はこう言いながら、壁上の大癡《たいち》を仰ぎ見ました。この秋山がかつて翁の見た秋山かどうか、それはもちろん誰よりも翁自身が明らかに知っているはずですが、ですから私も王氏同様、翁がこの図を眺める容子《ようす》に、注意深い眼を注いでいました。すると果然《かぜん》翁の顔も、みるみる曇ったではありませんか。

しばらく沈黙が続いた後《のち》、王氏はいよいよ不安そうに、おずおず翁へ声をかけました。
「どうです？ 今も石谷《せきこく》先生は、たいそう褒《ほ》めてくれましたが、」
私は正直な煙客翁が、有体《ありてい》な返事をしはしないかと、内心 | 冷《ひ》や冷《ひ》やしていました。
しかし王氏を失望させるのは、さすがに翁も気の毒だったのでしょう。翁は秋山を見終ると、叮嚀《ていねい》に王氏へ答えました。
「これがお手にはいったのは、あなたのご運が好《よ》いのです。ご家蔵《かぞう》の諸宝《しょほう》もこの後《のち》は、一段と光彩を添えることでしょう」
しかし王氏はこの言葉を聞いても、やはり顔の憂色《ゆうしょく》が、ますます深くなるばかりです。
その時もし廉州《れんしゅう》先生が、遅《おく》れ馳《ば》せにでも来なかったなら、我々はさらに気まずい思いをさせられたに違いありません。しかし先生は幸いにも、煙客翁の賞讃が洩りがちになった時、快活に一座へ加わりました。
「これがお話の秋山図ですか？」
先生は無造作《むぞうさ》な挨拶《あいさつ》をしてから、黄一峯《こういつぼう》の画《え》に対しました。
。そうしてしばらくは黙然《もくねん》と、口髭《くちひげ》ばかり嚙《か》んでいました。
「煙客先生《えんかくせんせい》は五十年 | 前《ぜん》にも、一度この図をご覧になったそうです」
王氏はいっそう気づかわしように、こう説明を加えました。廉州《れんしゅう》先生はまだ翁から、一度も秋山《しゅうざん》の神逸《しんいつ》を聞かされたことがなかったのです。
「どうでしょう？ あなたのご鑑裁《かんさい》は」
先生は歎息《たんそく》を洩らしたぎり、不相変《あいかわらず》画を眺めていました。
「ご遠慮のないところを伺《うかが》たいのですが、」
王氏は無理に微笑しながら、再び先生を促しました。
「これですか？ これは」
廉州先生はまた口を嚙《つぐ》みました。
「これは？」
「これは癡翁《ちおう》第一の名作でしょう。この雲煙の濃淡をご覧なさい。元気 | 淋漓《りんり》じゃありませんか。林木なぞの設色《せつしょく》も、まさに天造《てんぞう》とも称すべきものです。あすこに遠峯が一つ見えましょ。全体の布局《ふきょく》があのために、どのくらい活《い》きているかわかりません」
今まで黙っていた廉州先生は、王氏のほうを顧《かえり》みると、いちいち画の佳所《かしょ》を指さしながら、盛《さかん》に感歎の声を挙《あ》げ始めました。その言葉とともに王氏の顔が、だんだん晴れやかになりだしたのは、申し上げるまでもありますまい。
私はその間《あいだ》に煙客翁と、ひそかに顔を見合えました。
「先生、これがあの秋山図ですか？」
私が小声にこう言うと、煙客翁は頭を振りながら、妙な瞬《まばた》きを一つしました。
「まるで万事が夢のようです。ことによるとあの張家《ちょうけ》の主人は、狐仙《こせん》か何かだったかもしれませんよ」

* * *

「秋山図の話はこれだけです」
王石谷《おうせきこく》は語り終ると、おもむろに一碗の茶を嚙《すす》った。
「なるほど、不思議な話です」
[# 「りっしんべん + 軍」、第4水準2-12-56] 南田《うんなんでん》は、さっきから銅鑒《どうけい》の焰《ほのお》を眺めていた。
「その後《ご》王氏も熱心に、いろいろ尋《たず》ねてみたそうですが、やはり癡翁の秋山図と言え、あれ以外に張氏も知らなかったそうです。ですから昔煙客先生が見られたという秋山図は、今でもどこかに隠れているか、あるいはそれが先生の記憶の間違いに過ぎないのか、どちらとも私にはわかりません。まさか先生が張氏の家へ、秋山図を見に行かれたことが、全体 | 幻《まぼろし》でもありますまい、」
「しかし煙客先生《えんかくせんせい》の心の中《うち》には、その怪しい秋山図が、はっきり残っているでしょう。それからあなたの心の中《なか》にも、」
「山石の青緑だの紅葉の [# 「石 + 朱」、第3水準1-89-1] 《しゅ》の色だのは、今でもありあり見えるようす」
「では秋山図がないにしても、憾《うら》むところはないではありませんか？」
[# 「りっしんべん + 軍」、第4水準2-12-56] 王《うんおう》の両大家は、掌《たなごころ》を拊《う》って一笑した。

底本：「日本文学全集28芥川龍之介集」集英社
1972（昭和47）年9月8日発行

入力：j.utiyama

校正：もりみつじゅんじ

1999年5月15日公開

2004年3月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。